

デイリーライフ アジア 2016**北澤潤****プロジェクト概要**

本プロジェクトは、異なる文化をもつアジア他国に長期滞在し、その土地の日常的感覚をじっくりと獲得するプロセスを土台に、現地の文化的背景や社会状況をリサーチし、それらを踏まえた新たなアートプロジェクトを構想するものである。

1年間に渡りジャカルタを拠点とし、ジャワ島、スラウェシ島、バリ島といったインドネシアの各島々に暮らす人びとの生活をリサーチしながら構想をまとめていく。

また、ジャカルタで暮らす中での出来事やリサーチ先での発見、さらには構想に至る前のアイデアといった様々な情報をアーカイブ作品『DAILY LIFE』として残す。日記やレシート、写真、スケッチ、拾ったものなども含む1日の断片を1枚にまとめたコラージュを日々制作し、最終的に1年分、約300ページの冊子として束ねる。

これらの活動全体を通じて、これまで主に日本で取り組んできたアートプロジェクトの表現手法だけでなく、言語や振る舞いといった自身の広い意味での表現行為を「日常」の観点から問い直しつつ、ジャカルタで盛んに行われてきた社会と関わる芸術実践の担い手たちとも関わりあうことで、日本におけるアートプロジェクトを再検証し、新たな可能性を模索したい。

受入協力者との協働内容

キュレーターのアンガー・ウィジャヤ氏が本プロジェクトのコーディネーターを担い、ジャカルタを中心としたリサーチ先の選定と同行、さらにはインドネシア各地で活動するアーティストらとのネットワークを共有しながらプロジェクトを進めた。

リサーチを繰り返しながら、新たなプロジェクトの構想段階においても議論を交わし、フェローシップ期間後のプロジェクト実施の礎を築くことができた。

実施報告

フェローシップ期間中に、毎月の活動内容を総括しながらキーポイントとなるリサーチや生活や制作をする

上でのさまざまな発見、プロジェクトの構想プロセスなどを定期レポートとして書き連ねていった。次ページ以降に全11回のレポートをまとめ実施報告とし、報告書の最後には本プロジェクト期間中に制作した計309枚の『DAILY LIFE』から抜粋した12枚を転載する。尚、期間中の活動プロセスをアーカイブしたウェブサイトのURLは <http://www.junkitazawa.com/ragunan> である。

リサーチ地域一覧ジャカルタ

- ・ラグナン
- ・バサルミング
- ・グダンサリナエコシステム
- ・マトラマン
- ・ムアラアンケ
- ・バサルスニン
- ・ブンジャリンガン
- ・カンブンプロ
- ・ルマススン マルンダ
- ・チキニ
- ・エルディオスクールオブアート
- ・カリジョドパーク
- ・カンブントンコル
- ・カンブンアクアリウム など

インドネシア各地

- ・ブンチャック
- ・ボゴール
- ・デンバサー
- ・スラバヤ
- ・デポック
- ・バンドウン
- ・ブミアユ
- ・スマラン
- ・マカッサル
- ・ウブド

April 2016

生活というプロジェクト： ジャカルタ郊外で拠点を探す

フェローシップ活動開始の4月。事前視察には来ていたものの、いざ1年を過ぎ始めるとなると様々な問題が生じる。住居兼オフィスとして拠点に落ち着くまでが予想以上に時間がかかった。生活の中心であり、今後各地を巡ることになるリサーチの出発／帰着地点でもある拠点地域を選ぶことは、思考の拠点は落ち着いてほしいというような「こちらの理想」と、この国の金銭感覚や安全性、生活リズムなどといった「ジャカルタの現実」とを天秤にかけながらの難しい作業だった。家探しといえばそれまでだが、何しろその「現実」が全くわからない。コーディネーターのアンガーが常に行動を共にできるわけでもないの、自ら物件を巡り、交渉をするというシーンもあった。分からない土地で何が出来るか。基本となる生活を形作る作業も、ここでは壮大なプロジェクトのように感じる。結果的に「DAILY LIFE」という活動名の通りに、「日常」をつくることそのものに苦戦し向き合う日々となった。1週間仮住まいとしていたホテルでの滞在は1週伸び、2週間かけてジャカルタ郊外を見て回りながら、最終的に南ジャカルタのラグナン地区に落ち着いた。タフさはいるが、この間自ら探し回って物件をたどるなかで見た景色は、「アート」といった特定の関心領域に関する場所を巡ったときよりも、リアルな「生活景」づくしだった。その点ではいいリサーチにもなったと思う。

May 2016

生活から制作へ：動きながらオフィスを整備する

生活がひとまず落ち着いてきた4月を終え、5月は制作環境の整備に時間を使った。生活そのものは「何事もうまくいかない」という前提を心に留めておくことを基本にすることで、徐々にこの国に慣れてきたものの、制作となると更にうまくいかない。具体的には借りた物件の一部屋に、こちらの屋台（ワルン）スタイルの机と椅子、1日1枚のドキュメント『DAILY LIFE』制作の素材となる日々のスケッチやレシートと資料を1ヶ月ごとにまとめる壁設置のファイル、棚、地図などを設置した。特に机と椅子に関しては、物件の大家さんとともに近くの職人の家に行き発注した。

屋台の簡易な雰囲気を求めていることを伝え、素材や値段を確定していく交渉のプロセスは、いずれプロジェクトを仕掛ける時にも役立つ経験だったと思う。自作した棚や机の塗装なども、この国の塗料や部材といった素材の性質がわからないため難しく、苦戦した。日本では当たり前に出ることが、ここでは当然のように出来なくなる。言わば「日常の初心者」となって手探りに生活／制作しているわけだが、プロジェクトが本質的に「日常への違和感」から発するものだとしたら、この「うまくいかなさ」を感じなくなってきた時が、新たな仕掛けを欲するサインなのかもしれない。



南ジャカルタ、ラグナン地域での小さな家と出会った



ジャカルタ・ラグナンの自宅一室を整備してオフィスにした

June 2016

リサーチ：日常を探す旅に出る

フェローシップ活動3ヶ月目となる6月には、初めての遠方リサーチとしてバリ島に出向いた。合計10日間の滞在のうち、最初の3日間はデンパサールやクタといった平地を中心に、それ以降は山間の町ウブドに滞在しながら都市部から離れた土地でのリサーチを行った。観光産業が盛えるバリ島では、クタ、デンパサール、ウブドのどの街も観光客でひしめきあう。し

かしながら、その表面から視点をずらせば、沿岸の更なる開発に反対する島各所での市民デモ運動、アート集団「TAXU (タクスウ)」以降のバリ現代アート事情、そして脈々と紡がれているバリヒンドゥーの儀礼(ウパチャラ)たち、といった様々な側面が見えてきた。中でも、今回は観光化されていない儀礼を体感することに多くの時間を使った。ウブド中心部から車で15分ほどのベジェン村の数日間にわたる寺院祭礼、その一晩に執り行われた「チャロナラン」では、「演じられた死体」を軸とした劇が長時間に渡り展開していく。数人の踊り手は神や悪霊を身体に降霊させ、瞬間的に忘我／恍惚の状態(トランス)にはいる。神や悪霊といった見えない存在と接続する儀礼的な時間がバリでは特別な存在としてではなく、生きる技として祭礼の時のみならず日常のどこにでも存在していた。

今回の旅は、私の活動における「リサーチ」の持つ意味について考え巡らす機会になった。ジャカルタのラグナンを拠点とした生活に落ち着き、自分の日常感覚がインドネシアに来た当初より固定化されてきた中で、あらためて全く異なるバリの生活文化に触れることで自分の日常を相対化する試みとしてのリサーチ。客観的に調査しそれを外部へアウトプットするのではなく、主観的に触れていくことで自分へインプットし、自身を揺さぶりなおす実践としてのリサーチ。その作法は、文化人類学において用いられる調査法のフィールドワークと重なる部分がある。学生時代にプロジェクトを始めた当初、同時に文化人類学を学んでいたそのルーツを久しぶりに紐解いた気分だ。他者の日常に触れることで、私自身に問いを持ち帰る。それが自分にとっての「リサーチ」なのだと思う。そこでの気づきが元となって、リサーチをした「ある日常」に生きる人びとにとっての再帰的な実践を提案するのが「プロジェクト」。誰かが誰か自身を問い直し続ける実践。それは継続することで、バリの儀礼で人びとが不可視の存在へと身体を近づけ「実際に」自分の存在を揺さぶるように、生きる技として現代社会に定着可能だろうか。

今まで使い倒してきた言葉をゆっくりと再考しながら、分断されがちな「生活」や「リサーチ」、「プロジェクト」をひとつなぎにすること、それがこの1年間のひとつの目標である。「1日」というもう一つの枠組みを用いて、1枚にまとめ続けていく『DAILY LIFE』は、そのための手段だ。



バリ島ギャンヤール県ベジェン村での儀礼「チャロナラン」にて

July 2016

プロジェクトの兆し： ジャカルタの葛藤に出会う

予定を立てても自然と崩れていき、ちっとも飼い慣らせなかったジャカルタでの日々。無意識に時間をコントロールしようとしてきた自分を改め、何が起きようとも「そんなこともあるさ」と受け入れる態度を獲得していくうちに、できることが増えていった7月。すべてがおかしく興味の対象であった滞在初期から変化していき、心身が「ジャカルタ化」しつつある今だからこそ違和感を感じる場所を探しはじめた気がする。例えば、この都市の「不条理が生み出す光景」について。

プロ村は、ジャカルタの真ん中を南北に蛇行するチリウン川沿いの地域だ。川縁に重なり合うように建てられた住居群はいわゆるスラムの景観を形成していた。水源地域の豪雨がチリウン川を増水させ、度重なる洪水は大きな被害をもたらしてきた、と同時にやはりこの村の習慣でもあったという。事前の情報収集で、2014年の護岸工事によって川近くに住む住民が政府の用意する高層団地へと移住したことを知った。またその過程で住民と政府、警察隊がぶつかり大きな社会問題となってきたことも。

やや道に迷いながらコーディネーターのアンガーと現地にとどり着くと、周りの景観からは異質で無機質な団地が目の前に現れた。移住した住民にとっては、地べたに近い水平方向の生活感覚から、縦軸を行き来する垂直方法の生活感覚への極端な変化。大勢を一度に収容する「団地」というシステムは、しばしばその背景に何かしらの問題や思惑が入り混じる。例えば、洪水から市民を守るという大義名分と同時に、土地の所有や制度が曖昧な不法占拠地とその住民を一掃し管理下に置く、といった表裏が存在するように。

切実な背景とは裏腹に、団地の一角に集まる屋台でおしゃべりをしたり笑い合いながら思い思いに過ごす人たち。その中にいた一人の小柄なおじいさんと仲良くなった。インドネシアのあらゆる島々に電線を渡す仕事をしていたという彼は饒舌で、知る限りの日本語や英語で楽しそうに語りかけてくれる。しかし、話がこの地域の開発と移住の問題に触れると、内側に押し込めていた何とも言えない怒りが語りの端々からはみ出しはじめた。

彼の部屋がある10階まで行くと、エレベーターホールでは子供たちが落書きしながら遊びまわり、ある部屋の前にはまるでここが路上であるかのように、見慣れた屋台型のミニ商店がつくられている。地べたの生活は忘却されないまま、ルールをはみ出て空中に浮かんでいるのだ。数年経たないうちに家賃を引き上げるという現在の政府の意向は、おじいさん一家の未来を曇らせ、きっとこの子どもたちや商店もまた別の場所へと移っていくのだろうと予感させる。

団地を離れ、護岸が整備された村の様子を案内してもらった。対岸は今まさに工事中。掲げられた横断幕に記されたテキストは、「もう争いはいらぬ」と主張している。堤防から一定の幅でつづくきれいな道路。川のように蛇行するその道路の幅にびったり沿って、立ち並ぶ家が「切り取られて」いた。潰されたり崩されたりといった撤去のイメージにはない、真っ二つに切断された家並み。笑いすら込み上げてくる滑稽度がさつな開発手法に対して、その断面を壁で埋めドアをつくり「新たな間取り」として使い変えようとする作業中の住民たちが遅しい。

まさにここに家があったと語るおじいさん。後ろについて護岸から残された住宅群の路地へと歩を進めると、今も彼がこの場所に住んでいるかのように幾度となく元隣人たちとの挨拶が交わされていく。真っ二つに切られた家たちと同じように、明確な線引きによってかつての住民たちの関係性も分断された。このおじいさんのように川により近い内側に住んでいた人は家を失って団地へと移住し、外側に住んでいた人は今までと変わらずここに住んでいる。決定的にプロ村の人びとの生き方を分断したその境界線は、実にシンプルであっけない単なる「道路幅」なのだ。

プロ村のリサーチでは、今までのリサーチで少なからず感じてきた「異文化への好奇心」とは違う感情が自分に沸き起こっているのを感じた。水平と垂直、定住と移住、洪水を防ぐ安全性と立ち退きの暴力性、家

を切り倒す重機のけたたましさと新しい間取りとして切られた家を加工する住民の遅しさ。相反する二つが対抗し、そのどちらが良くてどちらが悪いとは言い切れない葛藤。その葛藤がそのまま現在のプロ村の状況を成立させている。この村の光景は、どこかで見たことのある景色ではない。かといって、好奇心をそそる全く見たことのない景色でもない。言ってみれば「あるようでない」景色だ。プロジェクトを生み出す自然な欲求とは、葛藤を抱えた状況に向き合い、それを乗り越えてみようとする気持ちなのかもしれない。それがある社会の葛藤であろうと、個人の内的な葛藤であろうと。プロ村の子どもたちが開発で生まれた広い道路で楽しそうにサッカーをして遊ぶ様子は、大人の対立や矛盾を宙吊りにする「だって広いから」というシンプルな欲求にもとづいていて微笑ましく、どこか羨ましくもあった。



プロ村の護岸工事によって切り取られた家

August 2016

間（あわい）のアイデンティティ： 些細な日常をアーカイブする

Deng熱で長期ダウンを余儀なくされた8月。ようやく慣れてきた頃にこういう展開が起こるのも「ジャカルタらしい」と捉えて、まあ気持ちと体をリラックスさせることが望ましい。どうせ身動きが取れないならと、インドネシアでの日々を蓄積しながら公開していくためのウェブサイトを作った。「プロジェクト未満」のアイデアドローイングやフィールドワークの写真などの断片的な情報を載せていくこのサイトは、どんなプロジェクトをやってきたのか、どんなプロジェクトをやろうとしているのか、といった目に見える実践を中心に自分のこれまでとこれからを語ることへの些細な抵抗でもある。むしろそれらの境界にあるカタチにならない「未編集のいま」に自分の立ち位置を据

え直してみたい。いま何を見ているか、何を感じ、何を考えているか。それがそのまま表現の居場所になるような。インドネシアという異なる環境での一年を通してその視点と思考そのものが、ダイナミックな活動となっていく気がする。実践尽くしだったこれまでの10年とどうなるか分からないこれからの、間（あわい）に確かに存在する現在を淡々とアーカイブしていこう。



2016年8月27日公開時の「JUN KITAZAWA OFFICE RAGUNAN」ウェブサイトトップページ

September 2016

底知れぬインドネシア：

スラバヤリサーチで多様性を実感する

デング熱から復活し、一時帰国の前にインドネシア第二の都市スラバヤへ出向いた。現地で活動するアーティストコレクティブ「serbuk kayu (シルブク・カユ)」のメンバーに案内してもらいながら、各地を巡る。なぜか学校敷地の中にある中国風のモスク、インドネシアに初めてイスラム教をもたらしたというスナンアンペルの墓、古びた地元の遊園地、カオスな魚市場、そしてマドゥラ島。ジャカルタでの生活に慣れてきたからといって、インドネシアを知った気になってはならない。底知れぬ多様性にたじろぐことになる。

華僑のムスリムによってつくられた中国風モスクに、スナンアンペルの墓に併設する巨大なモスク。これまでジャカルタを中心に実にローカルなモスクや様々な施設の中にある小さなモスク（＝ムショラ）を目にしてきたが、誰でも入れると言われたりはするものの、好奇心だけでは足を踏み入れにくい雰囲気を感じていた。もちろんイスラム教の信仰を共にしない限りそうあって当然であり、中まで入ろうと思ったこともなかった。スラバヤで訪れた二つのモスクは、それ自体が観光スポットでもあるから当然といえば当然だが、その「圧」のようなものを感じない。それは空間の設計が

そう感じさせているというより、地元民たちの空気感が印象づいている気がしたのだ。地勢的な要因から、海民の往来が盛んで多様な文化と人種が流れ着いてきた古からのルーツがこの感覚に起因しているのではないかと深読みもしてしまう。

コンパクトな街のなかにいくつも鎮座するショッピングモールを横目に見ながら中心部から周縁部へと向かうと、全てが渾然一体とするジャカルタとは異なり、生活スタイル、もっといえば生活格差の違いが実にビビッドに感じられた。シルブク・カユなどアーティストコレクティブのスペースも多いスラバヤ西部から街の中心を眺めるとその眩さがまるで違う世界を眺めているような気分になる。中心部のいたるところにある「ワルンコピ」(小さなローカルカフェ)で、大人数の若者たちが思い思いに過ごす様子は、中心と周縁のギャップを貫通する密かな企てのようにも思えた。



スラバヤのワルンコピで過ごす若者たち

西部の平屋を拠点として若いメンバーが多く活発なシルブク・カユと、街の中心で大きな一軒家を使って拠点としている「C20 Library & Collabative」はどこか対照的だ。前者は若者たちの拠り所としても機能しつつストリートな感覚で周縁からスラバヤ中心部に働きかける。後者はライブラリーの名の通り書籍と一緒に多彩なメンバーの知性が蓄積していて、アクティビズムやアートに偏らない社会学的なアプローチはもはや単なるアートスペースと言えないほどだ。両方のスペースでのプレゼンテーションとディスカッションは、この街のコレクティブの幅と奥行きを感じることができ有意義なものとなった。この街のビビッドな格差を逆手に取り、幅広いコレクティブと協働するプロジェクトができないものか、旅の後半はそんな風に思考を巡らせていた。

November 2016

都会のサバイバーたち： ブンジャリンガンでのプロジェクトを構想する

遠方へのリサーチや日本への一時帰国も経て、改めてジャカルタでのプロジェクトを考えている。一年間の拠点として選んだ時に直感したこの街の面白さは、自分の中で高まるばかりだ。東京とジャカルタを比べてみると、都市人口世界第1位と第2位の大都市でありながら、その様相は果てしなく異なっているように思える。東京を歩くと、行き交う人びとの色彩豊かで時に奇抜なファッションに改めて驚く。しかしながら、そんな表面的に滲み出る「個性」は、実は不可視の社会制度や無自覚な規定された文化といった土台に成立している、言ってしまうと「つくられた自由」なのではないだろうか。一方ここジャカルタにおいては、インフラ整備が整っていないなどといった言い訳は通用しないほどに、徹底的にずる賢く人間が制度をはみ出し使いこなしてしまう。そんなジャカルタを見ると、「結局、制度で人間は括れない」という紛れもない真実に気づかされる。そしてその真実は日本ではあまり暴露されない。ジャカルタ人は、「そんなこと当たり前」と周知の事実であるかのように振舞っている。一人ひとりがこの大都市を自らサバイブしているのだ。

日本でのアートプロジェクトが制度で括られた常識や関係性を引用し、それを「再流動化」する試みなのだとしたら、前提となる社会自体が極めて流動的なジャカルタにおいて一体何が可能だろうか。有り得るとすれば、この愛すべき混沌を社会の発展のためという名目で整頓しようと導入される「新しい制度」に対して（そうして生まれ得る画一的な未来に対して）、この都市の流動性を担保するオルタナティブな社会像を投げかけることではないだろうか。そう考え至ったときに、ようやく異世界であったこの都市で自分が何かを仕掛けていくことの必然性を獲得した気がした。

早速、カンブンプロやブンジャリンガンといった都市開発地（またはその候補地）の重点的なリサーチを行うことにした。東南アジア最大規模と言われ今年9月に一斉撤去となった巨大売春街「カリジョド」も、場合によってはリサーチの対象となるだろう。今はスケートパークへと変貌を遂げつつある。

久しぶりに訪れたブンジャリンガンで、この地域に根ざした活動を28年に渡り展開するTROTOARTのジョニと再会。毎週日曜日の早朝にTROTOARTのT

シャツを着た100人以上の女性たちがエクササイズする風景は「普通で異様」だ。想像してた以上に広いブンジャリンガンをバイクで案内してもらいながら、改めてこの都市の深みに気づかされる。高速道路の高架下で生活する人びと、ラグナン近辺ではあまり目にする事のない移動屋台の野菜売り、人口増加が著しい北部特有の増殖を続ける団地（＝ルマススン）。眼前に広がるこの社会の真っ只中で一体何ができるだろう。ブンジャリンガンとラグナン、現場の現実と抽象的な思考のあいだを往還しながら、プロジェクトの構想をはじめた。



毎週日曜日に行われているTOROTOARTのプログラムで踊る女性達

December 2016

裏返しの地図： リサーチからの拡張

11月、久しぶりに訪れたブンジャリンガン地域。12月は定期的に通ってリサーチを深めていくことにした。これまではTROTOARTの活動拠点であった彼らの住まい近辺しか見てこなかったが、通うなかで想像以上にこの地域が広大であることを知った。コタ駅の北西から、以前リサーチで行った最北の魚市場「ムアラアンケ」までも含む一帯がブンジャリンガンなのである。カリジョドもほど近い。こう見ると、（チリウン河流域を除けば）いままで見てきた再開発と立ち退きの候補地及び実施地は、ほぼこのエリアに位置していることに気づく。ジャカルタの行政区分や地名に、時間をかけて詳しくなってきたからこそこの発見だが、頭の中では現実的な位置関係とは別の、ぼんやりとした「新しい地図」が浮かび上がってきていた。

それは、リサーチを通して平面的ではない様々な深度をもって蓄積されてきた情報が、ブンジャリンガンからの視点を獲得したことで一つのパースペクティブに統合されていくような感覚だ。ここから見える範囲

だけでなく、移住を迫られた人びとが多く移り住む北東郊外のマルンダ団地や、チリウン河流域のカンプンプロといった地域をイメージの中でプロットする。すると、都市を南北に走るチリウン河を血流としながら、北部へと逃避するように広がる「都市の漂泊民」たちを軸とした「もうひとつのジャカルタ」が、想像上のレイヤーとして描けるのではないだろうか。それは表面上に知覚される、経済発展地ジャカルタセントラルから捉えた認識とは異なる、見えづらい（が、たしかな）ジャカルタと言える。中央に人が集まり続ける発展の裏返しとして、エッジを渡り歩く人もいる。どちらも（／誰もか）さまよっている。

都市のマイノリティを考えるという一面だけでなく、「裏返しの地図」を可視化させ「正しい」地図に重ね合わせることで、この都市で生きる誰もが漂泊民であることを確認する経験。それを実現するには？と、落としどころの見つからないアイデアが浮かんでは消えていく。これまでのリサーチが、いつのまにか一つに繋がっていき実感を掴みながらも、もはや「プロジェクト」に収まるのだろうか戸惑っていてもいる。方法論の拡張が差し迫っているのかもしれない。



ブンジャリンガンの団地から高架下の住宅地帯を見下ろす

January 2017

新たなリサーチ： スマランの山羊村

1月末、中部ジャワの街スマランを訪れた。2014年に国際交流基金のプログラムに参加していた現地在住キュレーターのアディンと連絡を取り合い、3年越しの念願が叶った。街の北部の海岸から南部の山間までは、およそ10kmの距離。人口は約150万人。大きさと人口規模からみても、実にちょうどいい。そう、「ちょうどいい」というのがこの街の第一印象だった。街を車やバイクで走ると、その地形が実に起伏に富んでいることが分かる。海や河を眺めていたかと思えば、あっ

という間に丘を登り、山間の景観が目の前に現れる。都会過ぎず田舎すぎない、便利すぎず不便すぎない。一言で言えば、「ちょうどいい」のだ。

二泊三日と短い滞在ではあったが、スマラン南部を拠点とするアートコレクティブ「ヒステリア」の面々が案内してくれて充実した時間となった。国立ディポネゴロ大学では日本語学科の学生や先生方に歓迎され、1時間ほどのレクチャーを行った。ヒステリアの拠点でもプレゼンテーションとディスカッションを行い、日本での実践とインドネシアでの一年に渡るリサーチについて共有することができた。

春節と時期が重なったこともあって訪れた中華街の夜市にはじまり、丘の上に広がる墓地や、オランダ統治時代の建築物が残る旧市街など、スマラン市街各地を巡った。その中でも印象深かったのはヒステリアが長年活動している旧市街地近くの地域、バスタマン村である。古くはオランダの統治時代に建てられた住宅群だったと思われるが、時を経て、インドネシアの生活感がその歴史に覆いかぶさり、完全に我が物にしている。村の中央には公共浴場があり、トイレとシャワールーム、2階の集会室、さらには排泄物からのメタンガスを利用した炊事場まで併設されていた。日常生活に欠かせない営みを中央の公共空間が担い、それぞれの家は言ってしまうと各々の寝床。地域全体が一つの「家」になっている。

そして、その「家」に住むのは何も人間だけではない。軒先や路上の籠に棲む色とりどりの鳥たち。堂々と歩き回る猫。これらはジャカルタでも当たり前の光景だ。あとは山羊。山羊もジャカルタでよく路上で買われたり売られたりしているものの、バスタマンでは人間との関係性の濃度が異なっていた。つまり、山羊と人間の関係が近くて濃い。物理的に、人びとが生活する部屋のすぐ横に山羊が生きており、山羊を捌き売る仕事の人が定期的に屠殺する。その肉や骨は小さな商店を営む隣人たちが購入し、彼らはそれを山羊のスープにする。また別の隣人はそのスープを毎日のように食べてお金を払う。生命と経済の循環が、手の届く範囲でめくるめく繰り返されているのだ。排泄をし、それをメタンガスに変え、何かを調理し食べる、といった行為と物質の循環と同じように、山羊は生き、死に、食われ、育ち、また育てられている。

インドネシアでは都市の真っ只中で今も尚、目の当たりにする（ことができる）人間と他の動物たちの「隠蔽なき関係性」。換言すれば、動物たちを捕らえ、売買し、愛でたり、食すことは、人間の都合に他ならない

が、ここではそういった人間の業がちっとも隠されず、曝け出されているということだ。それも、実に何気なく。とにかく、路上の動物たちに感じてきた「何か」が、バスタマン村にぎゅっと凝縮されている気がした。そして、この村と出会ったことでそれが少しずつ言語化されていく予感がする。こういった小さな予感を積み重ねていくことがきっとまた新たな作品へと繋がっていくのだと信じた。そういえば、バスタマン村のある村人によると、実際この村は以前「カンブン カンビン」という名だったのだという。和訳すれば、「山羊の村」である。



スマラン市街バスタマン村の路地にて

February 2017

これからの作品

現場を見つけ出し、そこでのプロジェクトを構想し実現する。ここインドネシアでも、そういったプロセスを無意識的なぞらえようとしていたのは、これまでのやり方がよほど染み付いているからなのかもしれない。プンジャリンガンでのプロジェクト構想が行き詰まったことでその無意識の方法論にあらためて疑いをかけ、逆にその思考から距離をとりながらスマランや中部ジャワの山間部ブミアユにも足を伸ばしてきた。そのおかげか、2月はこれまでの脈絡のない日常的経験や各地でのリサーチで感じたものが、ごく自然とアイデアとして浮かび上がってくる兆しを感じた。ラグナンでの生活リズムに沿いながら、アイデアを待った。隣人たちとコーヒーを飲み、ゲームしないかと誘われ、急に停電がおとずれる。オフィスでこれまでの写真を見直し、改めてそのなかに関心事の傾向をいくつか見出し、こっちの雑多な質感の紙を並べてアイデアの断片を描きつけていったり。身体化されてきた日常と、それに対する企て。生きることと創ることがごく自然に同居する、穏やかな日々。

最終的に、3つのシリーズと5つのアイデアをまとめた冊子「FUTURE WORKS (= これからの作品)」を制作した。副題は「From everyday experiences in Indonesia (インドネシアでの日々の経験から)」。すぐにでもできそうな小さな計画もあれば、想像するだけでいくつかの交渉を必要とし政治的な側面とも接するきわどいアイデアもある。プロジェクトらしいものもあれば、オブジェクトが中心となるものも。他業種との連携によって経済的な流通にも介入する可能性を含むものだってある。形式にさほど囚われないアイデアが並んだのには、表現の形式以前にある「その表現がどこから来たのか」という構造自体が、この一年で変化したからだと思う。無理に構想をひねり出すのではなく、ごく自然に暮らしながら、徐々に経験が蓄積し、異国としてではなく自らの日常として違和感が湧き出てくる。そこから素直に実践を企てていけばいい。自分を含む私たちの日常を飛躍させるために。明確な目的をもって滞在するのではなく、この日常を生きってみること。それが表現の手前にある構造に変化を及ぼした。言うなれば「^{からだ}身体が変わった」。

長い時間をかけたからこそ、形式は違えど、この土地の今の社会状況に即す共通性をもった「これからの作品」たち。残りのフェローシップ期間でこれまで出会ってきた人たちとアイデアを共有しながら、これからは繋げていきたい。



「FUTURE WORKS」

March 2017

フェローから友人へ： プレゼンテーションを繰り返す日々

フェローシップ期間の最終月となった3月。この一ヶ月の間、アイデアの詰まった冊子「FUTURE WORKS」を英語とインドネシア語に翻訳しリュックに入れていた。そして度々そのページをめくり、それぞれのアイ

ディアに関連する活動を行っているアーティストやデザイナー、コレクティブ、研究者、建築家たちにプレゼンテーションを繰り返した。彼らのほとんどは、これまでのジャカルタ生活やリサーチの中で出会ってきた友人たちだ。現地のアーティストたちと出会うなかで自然と構築されてきたネットワークが、プロジェクトを生み出すときの助けとなる。これは実にインドネシアらしい進め方だと言えると思う。プロジェクトのためにあらゆる人員を結集する、というような力技の方法論とは異なり、友人同士の関係性があつた上でその結果として活動が生まれていく。「仲間内の内輪な世界だ」というような批判の余地がないほどに膨大に広がるその関係性は、ネットワークというより、もはやエコシステム（生態系）に近い。アーティストや活動家たちの「友人関係」は、その活動ジャンルなどという括りに阻まれず、インドネシアの各島々に広がっているのだ。

その意味において、ジャカルタのアートコレクティブ「ルアンルパ」が「あいちトリエンナーレ2016」の展示会場において、「アートより友人」と書かれた手製の横断幕を掲げたことは、日本の観客にとってはどこか白々しく映るかもしれないが、今の私にとっては逆に当然すぎて「なにをいまさら」と思うほどの必然性を持っている（付け加えておくと、このルアンルパこそが、インドネシアの親密なアートエコシステム形成の重要なハブとなってきたのも事実であり、南ジャカルタにある彼らの拠点は「グダンサリナエコシステム」と名付けられている）。それがインドネシアなのだ。

ルアンルパの一員であり、日本でのキュレーター経験もつ Leonhard Bartolomeus 氏へのプレゼンテーションでは興味深い指摘をされた。「FUTURE WORKS」の三つあるシリーズのうちの一つ「SEKOLAH（＝学校）」は、インドネシアの子どもたちが日常的に使っている折りたたみ式の小さな学習机に着目し、移動可能でどこにでも出現する「公共の学校」を構想するシリーズだ。このアイデアを聞いたときに彼は「実にインドネシアらしいプロジェクトだ」と口にした。たしかに、インドネシアにおける教育は、学校制度の中で交わされるというより、たとえば路上の屋台に人が集まり知識を交換しあうことから自然と子どもたちに開かれていく。ヒエラルキーを含む教師と生徒という関係や、個人主義的な勉強方法はそもそもインドネシアらしくないのかもしれない。彼はこうつぶやいた。「モスクでのムスリムの学びは、教師と生徒のように一人

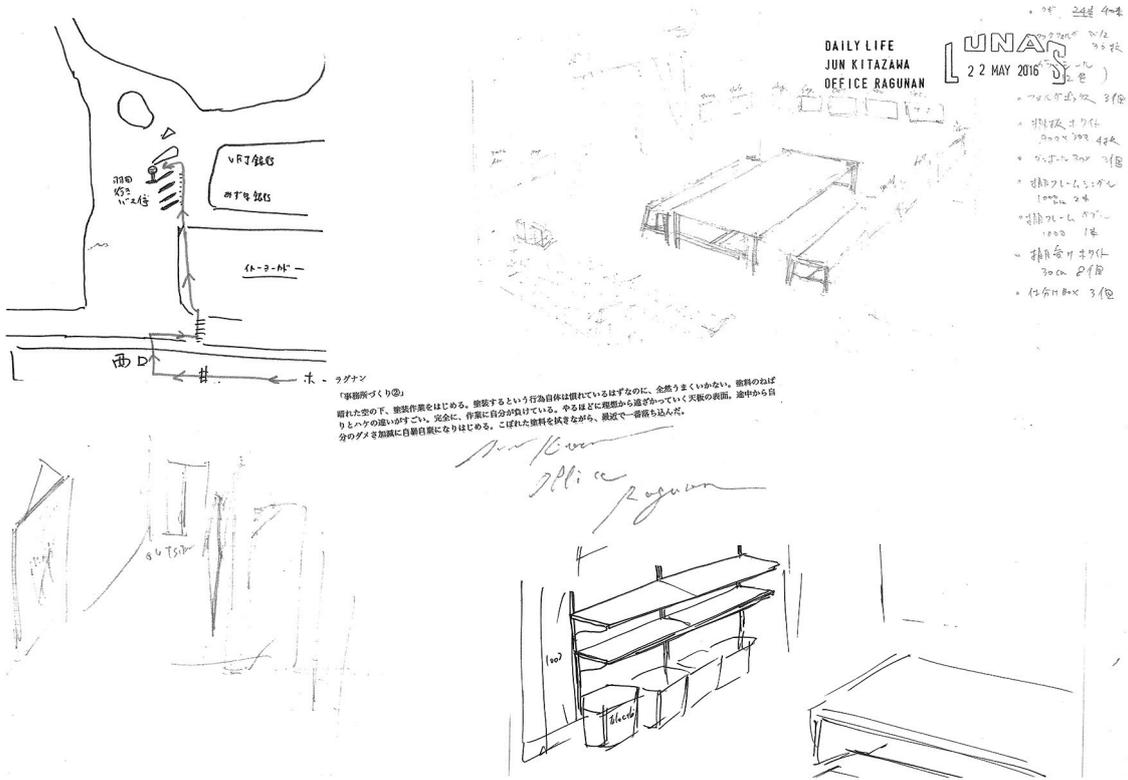
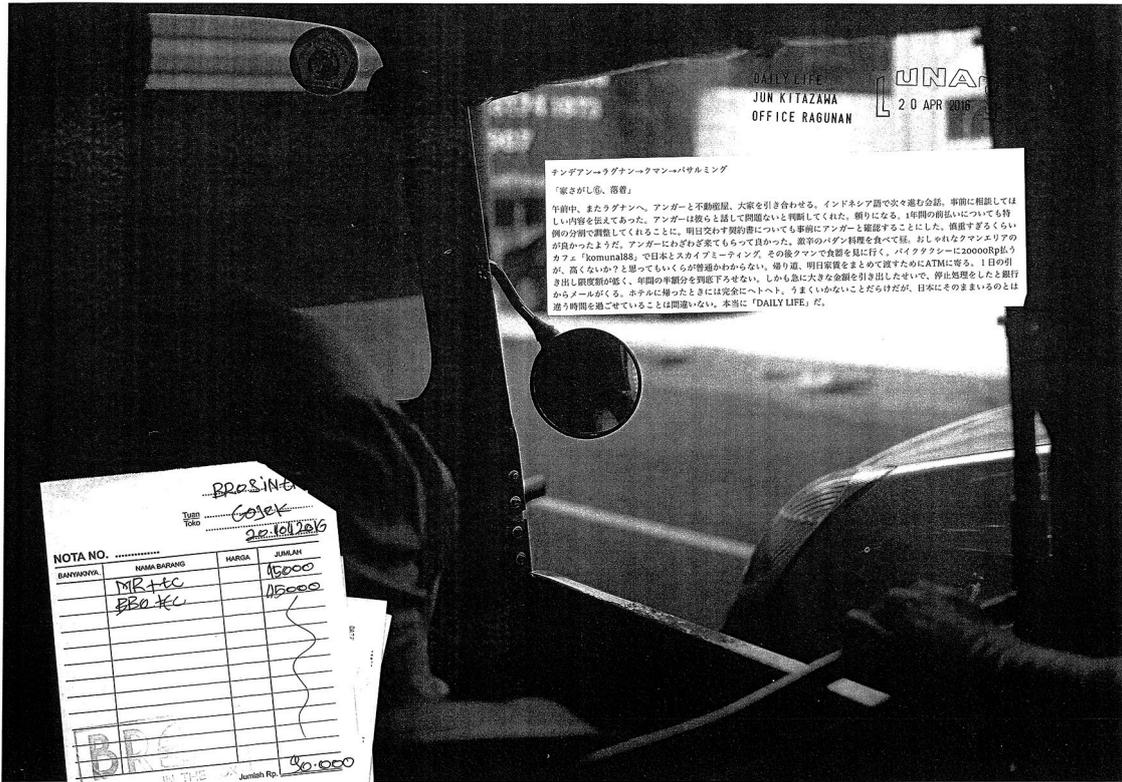
対多数ではなくて、常に小さいテーブルを囲む対等なディスカッションなんだよ」。古来の日常的な学びの風景と、急速に発展する学校教育。そのどちらも混在する混沌の島々で、私はこのシリーズをはじめの意味を見出していた。また、「SEKOLAH」だけでなく、他の二つのシリーズ「RELOKASI（＝移転）」と「KANDANG（＝籠）」についても、友人たちは「インドネシアに根ざしたアイデアだ」という共通の認識を持っていた。計10回のプレゼンテーションを通して、一年のフェローシップ期間ですっかり内在化された自分の中のインドネシアを確認することとなった。

最初から目標を定め、日本での活動をこの国に効率よく持ち込むのではなく、改めて自身の表現手法に疑いをかけながら、アジアの他者とその日常を過ごすこと。「DAILY LIFE ASIA 2016」と名付けた今回のフェローシップ活動は、1年前に想定していた意味を超え、アジアの隣人たちと共にプロジェクトを始めるための「ふるまいと思想」を耕す旅となった。この基本姿勢をもたない限りは、試みがきつとどこか上滑りしてしまう気がする。こうした異文化の真っ只中で日常に根ざしたプロジェクトを生み出していく創作者たちを「フィールドワーカーとしてのアーティスト」と呼んで仲間を募りたい。人類学と芸術実践を結ぶ楽しい道筋として期待してもいいかもしれない。

とにかく、耕した姿勢といくつかのアイデアを携えながら、現地でのプロジェクトを実現していく新たなフェーズが始まる。フェローシップとしての期間は終わったものの、インドネシアとの友人関係はこれからも長く続いていきそうな予感がしている。



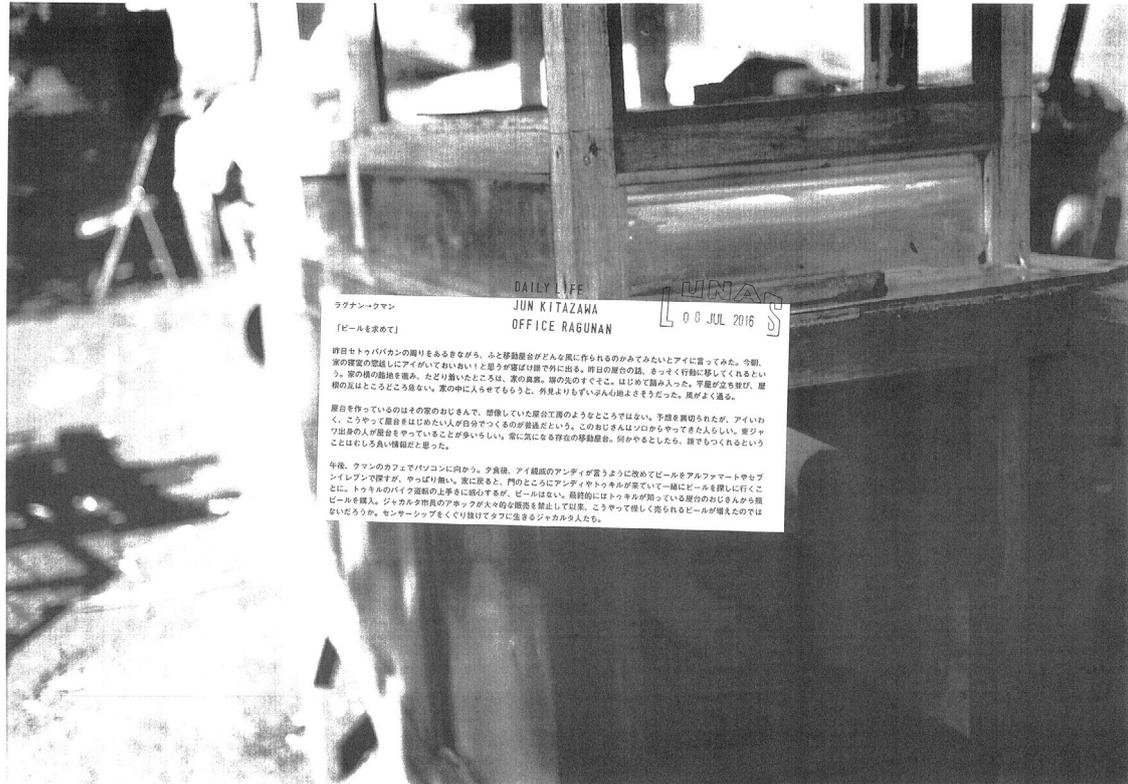
フェローシップ活動最終日、ジャカルタ・ラグナンの隣人たちと



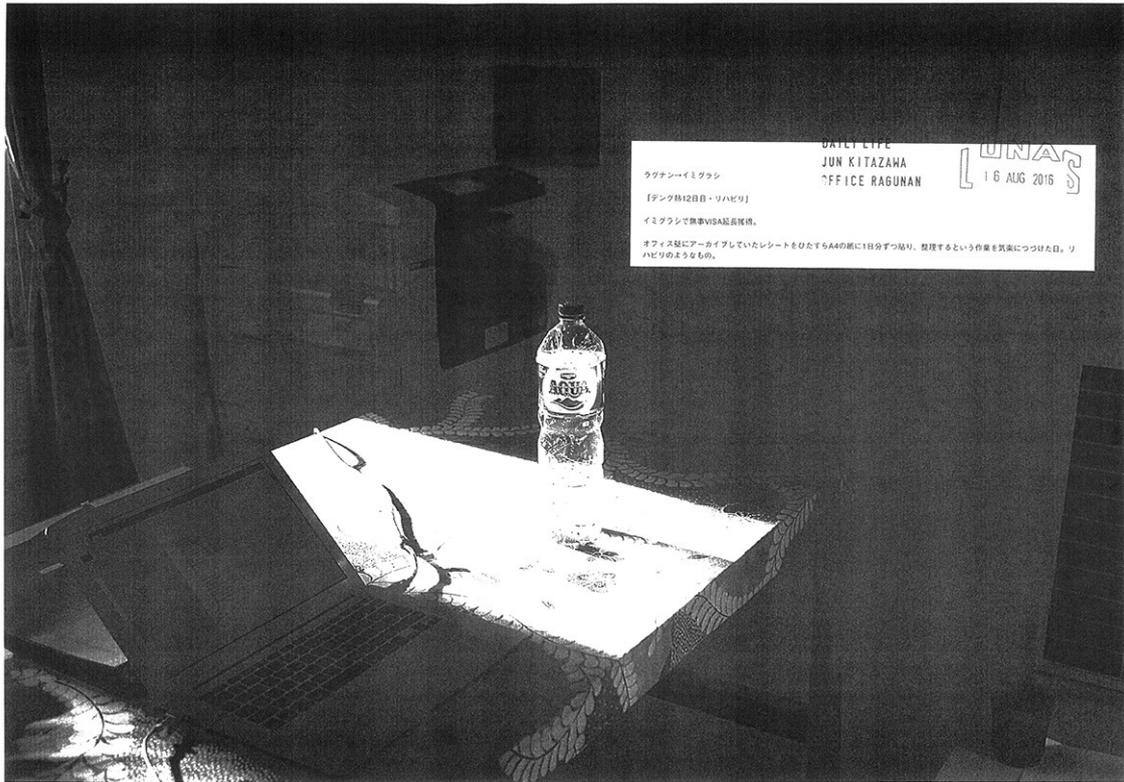


NO.	Uraian	QTY	UNIT	ESTIMASI HARGA
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

ラダナン
 「朝作、夜の足付、バタワイ」
 ラダナンまわりで「DAILY LIFE」を作るために日中色々動く、カッターマツをようやく探し当てる。デンマーク製。社にはなく、夜に竹と分厚いシートでできる店。勇気を出して行ってみる。即座に組み上げるために工夫された構造。まわりがガードレールなんかをうまくつかう。ガードレールを倒せば、勝手に、店ができるんじゃないかと、色々考えた。門番のアイとご近所さんが毎晩のように、軒下に椅子を敷べ、だらっと過ごしている。そこに今日初めて参加してみた。らんだん屋のように目を覚ましながら歩く巨人はオンデンオンデンといひ、バタワイ族の文化だった。食べたとすおれおれめ食べたカッターマツの組立現場。結構なふりでおかしい。みんな眠ってるたばこ「GUDANG GARAM」の会社で働くご近所さん。たばこ話に詳しい。コピを飲んで話すのがインドネシアの文化だ。これで配達だと台んでくれるアイ。また話さう。



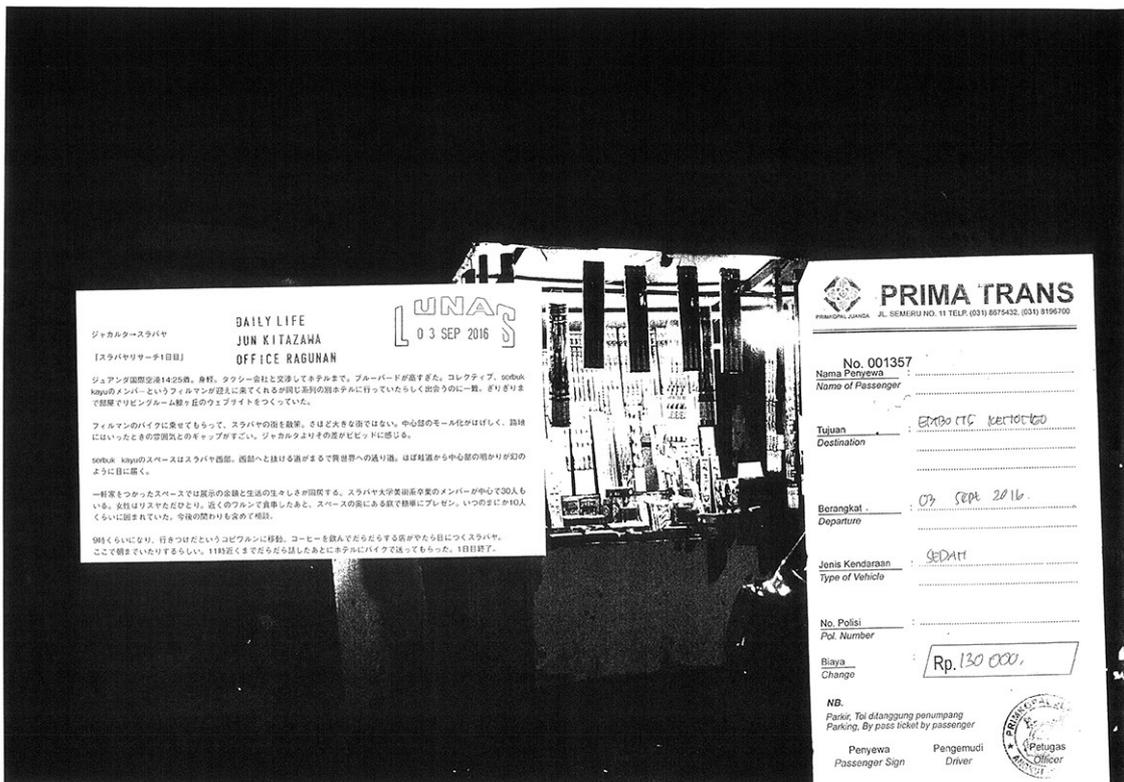
ラダナンワマン
 「ビールを求めて」
 昨日セトババの周りをあるあるながら、本と雑誌屋台がどんと風になられるかみてみたいとアイに言ってみた。今朝、家の扉の隙間にアイがいておれい！と思ってたが扉で出て出る。昨日の扉の隙間、さっそく行動に移して行くという。家の扉の隙間を覗み、たどり着いたところは、家の裏庭。扉の先のすぐそこ。はじめて踏み込んだ。扉が重たさげ、扉の互はところどころ重たい。家の中に入らせてもらおうと、外見よりもずいぶん心細いさうだった。扉がよく通る。
 扉を作っているのはその家のおじさんで、想像していた職人工房のようなところではない。手話を習得されたが、アイいわく、こうやって扉を作りはじめた人が自分で作るのが普通だといひ。このおじさんはソコからやってきたらしい。扉がけの扉の扉を作っていることが多らしい。常に気になる存在の移動扉。何かやるとしたら、扉でつくれるという事はむしろいい情報だと思った。
 午後、ワマンのファームでワマンに向かう。夕暮後、アイのアンチが言うように改めてビールをカッターマツやセブンイレブンで探す。やっぱりいい。家にいると、門のところにはアンチやトウキルが来て一緒にビールを探しに行くことに。トウキルのバイク運転の上るに慣れるが、ビールはない。最終的にはワマンの扉の扉のおじさんからビールを購入。ジャカルタ市長のアップが太った女顔顔を禁止して以来、こうやって新しく売られるビールが売れたのではないだろうか。モンサーンツをくぐり抜けてワマンに到着するジャカルタ人たち。



DAILY LIFE
 JUN KITAZAWA
 OFFICE RAGUNAN

LUNAS
 16 AUG 2016

ラグナン・イミグランド
 【シンガポール2日目・リハビリ】
 イミグランドで無事VISA延長取得。
 オフィスにアーカイブしていたレシートをひたすら44の紙に1冊ずつ作り、整理するという作業を気楽につづけた日。リハビリのようなもの。



ジャカルタ・スタバ
 【スタバリサーチ1日目】

DAILY LIFE
 JUN KITAZAWA
 OFFICE RAGUNAN

LUNAS
 03 SEP 2016

ジュアンタ国際空港1425番。身軽。タクシー会社と交渉してきました。ブルーボードが通ずる。コレクティブ、50000k Rpのメンバーというアパレルマンが迎えに来てくれるが同じ系列の別本舎に行っていたらしくお会合のうちに。ざりざりまで部屋でリビングルームを長クワイアイトをつくっていた。

フィリマンのバイクに乗せてもらって、スタバの面を眺め、さほど大きな面ではない。中心部のモール化がはげしく、道にはいったときの空気がこのキップがすごい。ジャカルタよりその面がビビッドに感じる。

SORBA kageのスペースはスタバ西部。西部へと抜ける道がまるで異世界への通り道。ほぼ毎週から中心部の暗がりの方が目に映く。

一軒家をつめたスペースでは旅先の記録と生活の生かしが両立する。スタバや大学英語系系のメンバーが中心で30人もいる。気持はリズリズな感じ。近くのアルンで食事したあと、スペースの奥にある狭い駐車スペース。いつの間にか10人くらいに埋まっていた。今後の際りも改めて確認。

9時くらいになり、行きつけだというコピペルンに移動。コーヒーを飲んでたらららする音がやたら目につくスタバ。ここで寝ていくつもりらしい。11時頃までならららしたあとに手帳にバイクで帰って来た。1日終了。

PRIMA TRANS
 PRIMA TRANS JANDA AL. SEMERU NO. 11 TELP. (031) 8975432, (031) 8194700

No. 001357
 Nama Pelayang
 Nama of Passenger

Tujuan
 Destination

Berangkat
 Departure

Jenis Kendaraan
 Type of Vehicle

No. Polisi
 Pol. Number

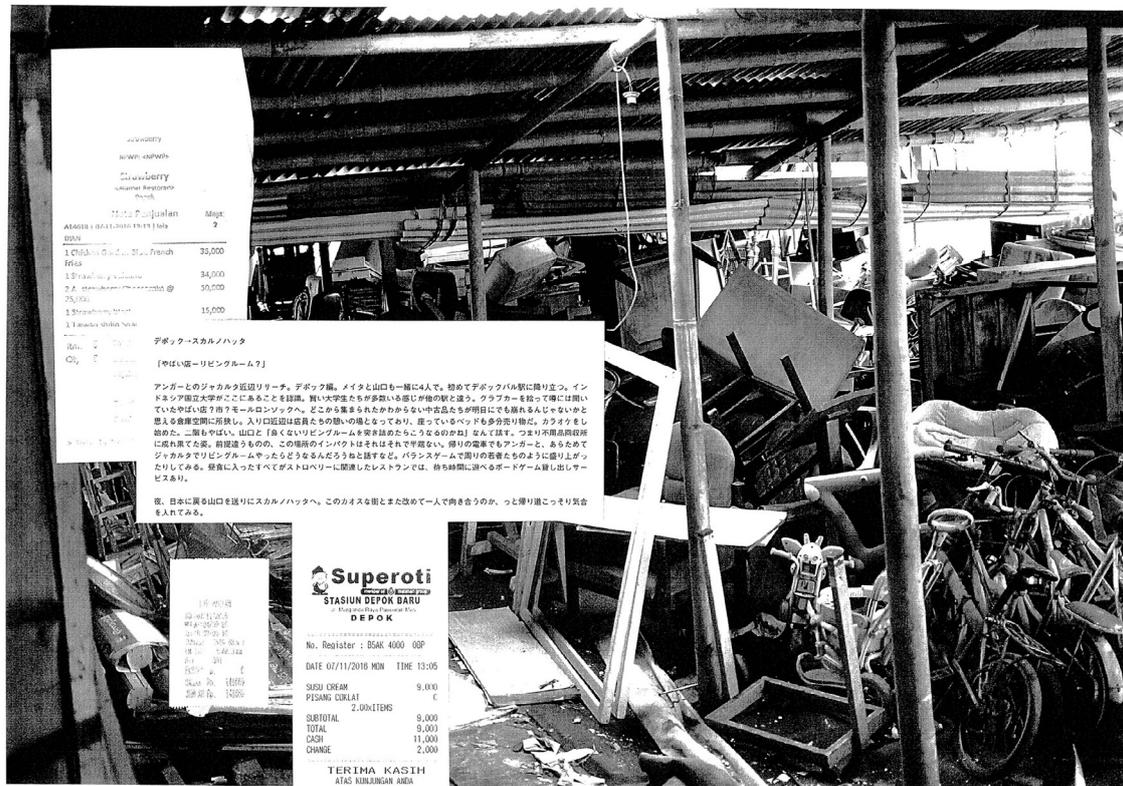
Biaya
 Change

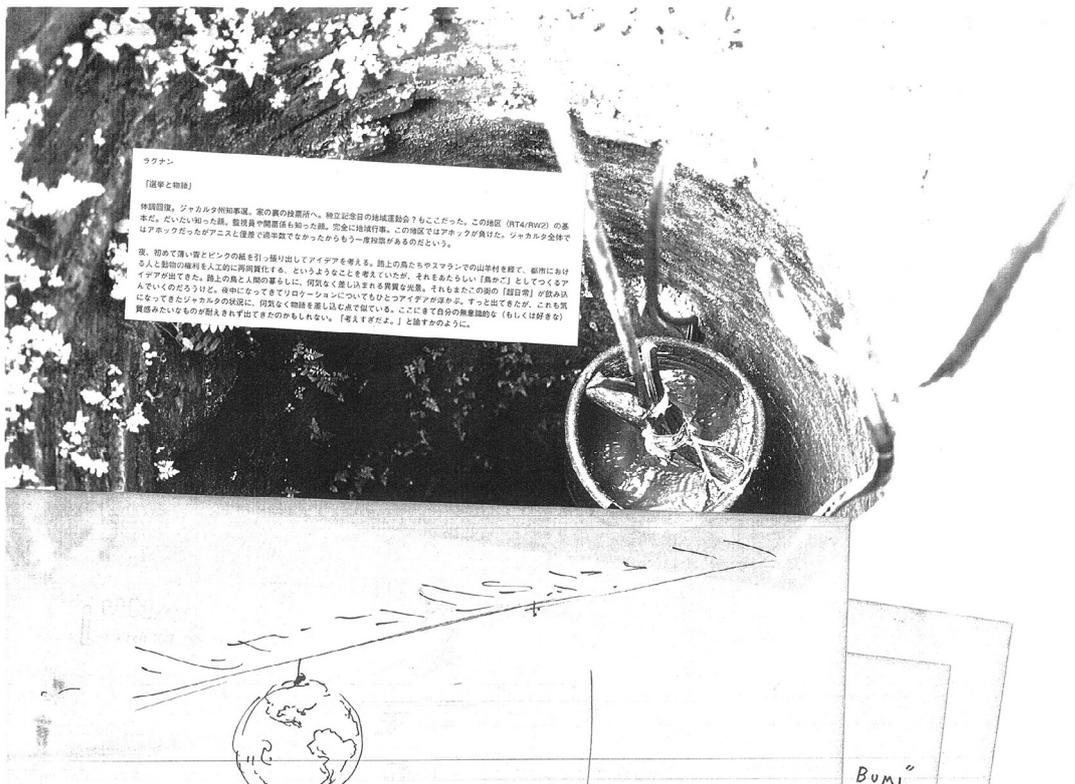
NB.
 Parkir. Tol ditanggung penumpang
 Parking. Toll by passenger

Penyewa
 Passenger Sign

Pengemudi
 Driver

Petugas
 Officer





ラクナン
 「道草と物縁」
 体験回廊。ジャカルタ州知事選、家の裏の雑草狩へ。独立記念日の地域運動会?もここだった。この地区 (T4/M2) の基本だ。だいたい知った後、塾役員や職員も知った後、完全に地域行事。この地区ではアキツが負けた。ジャカルタ全体ではアホックだったアニスと理髪で後半戦でなかったからもう一層寂寥があるのだという。
 夜、初めて薄い雪とピンクの紙を引、送り出してアイデアを考へる。路上の鳥たちやスマランでの山歩村を経て、都市における人と動物の権利も人工的に再構築する。そういうようなことを考へていたが、それをあたらしい「鳥かご」としてつくるアイデアが出てきた。路上の鳥と人間の暮らしに、何気なく差し込まれる装置が装置。それもまたこの家の「器日常」が飲み込んでいくのだろうか。都市にたかってきてリロケーションについてもひとつアイデアが浮かぶ。ずっと出たことが、これも実はなってきたジャカルタの状況に、切實なく物縁を差し込むことで起きている。ここに来て自分の無意識的な(もしくは好きな)質問みたいなものが問入られず出てきたのかも知れない。「帰るべきだよ。」と諭すかのように。

FUTURE WORKS

from everyday experiences in Indonesia

ラクナン
 「制作③」
 厚めで雑多な質感、窪みで雑多な質感、トレベ、袋状専用の赤青黄色、の紙。インドネシアで手に入れた紙を使いながら、調子の悪いつじーと他類しながら「FUTURE WORKS」を一日にまとめた。和紙じ製本でつくと、一冊を閉じるときの心持が違う。これまでない感じが、ひたすらこの道から来た一冊に込められている。想像しにくくもなってきたが返りけなくはない。日常への関心を保ちながら自然体でアイデアが生まれていく今の体づかいは大変にしたい。考へること、言葉にすること、実践すること。リサーチ、プラン、プラクティス。これらを分けない。自然体の自分にそれらが常にある状態。混ざっている状態。別れてしまう「前」に重心を置いている状態。

JUN KITAZAWA